

三。ち。と。せ。に。な。る。て。ふ。も。の。こ。と。し。よ。り。花。さ。く。春。に。あ。ひ。に。け。る。か。な

〔奥儀抄中ノ上〕漢武帝は仙の法を習ひて、とけざりし人なり、七月夜漏に、西王母といふ仙人紫雲にのりて武帝の承花殿にいたる、時に東方朔といふもの、御前にありし時、かくれて屏風のうしろにをる、みかど不死の薬をこふ、王母いまだいたすべからずといひて、桃七枚をとりて手づから二枚をばくひつ、御門ののたまはく、このも、かうばしくむまし、うへんとおもふ、王母わらひていはく、これは三千年に一度なるも、なり、下土にう、べきものにあらず、この屏風のうしろに侍る童ぞ、三度ぬすみてたべたるものといふ、東方朔も仙人なり、かの仙宮の桃をよめり、

能因法師

〔千載和歌集^{十六}〕龍門寺にまうで、仙室に書付侍ける、

あ。し。た。づ。に。の。り。て。か。よ。へ。る。宿。な。れ。ば。跡。だ。に。人。は。見。え。ぬ。な。り。け。り

源朝臣兼昌

〔永久四年百首〕仙宮

乗て行鶴のはかせに雲晴て月もさやけくすむ山べかな

〔古今和歌集^{十八}〕つくしに侍りける時に、まかりかよひつ、碁うちける人のもとに、京にかへり

紀友則

まうできてつかはしける、

故郷は見しごともあるすおのゝえのくちし。所ぞ戀しかりける

〔八代集抄^七〕斧の柄の朽しとは、晋の王質といふもの、薪をこりに山に行たれば、仙人の碁をうつを見て、半日と思ひて立ぬれば、斧の柄くちたり、舊里に歸りぬれば、七世の孫にあひたり、此心を碁をうちたるによりて、思ひよそへたり、

○按ズルニ、王質ノ故事ハ、述異記及ビ弈問等ニ見ユ、並ニ遊戯部圍碁篇雜載條ニ收メタレバ、宜シク參看スベシ、